

今後の課題

早生樹利用において期待されているもののひとつに「短伐期で高い生産力」というものがある。短伐期施業の導入が必ずしも高い生産力を生むとは限らないが、早く成長する早生樹では、スギやヒノキと比較して、植栽後から成林して林冠閉鎖する期間が短いことが予想される。しかし、短伐期施業については、過去に大規模な試験が実施されたが良好な結果は得られなかったことが報告されている。その研究は1962年より開始され、旧林業試験場（現森林総合研究所）と林野庁とが共同で実施した「合理的短期育成林業技術の確立に関する試験」である。この事業は「合短」と呼ばれ、短期間で単位面積当たりの収穫量の向上を目的（伐期短縮・生産力増強）として、全国50カ所に試験地が設定された。対象樹種は、カラマツ、コバノヤマハンノキ、アカマツ、スギ、アカシア類と、成長の早い樹種が対象とされた。試験期間は調査周期を7年おきと設定し、28年又は35年間であった。それぞれの樹種毎に生産収穫目標を設定（15年伐期又は30年伐期）し、丁寧な地拵え、施肥（一部樹種）、薬品による病虫獣害対策、下刈りを定量的に実施した。この結果、調査最終年とされていた28年目までに試験地としてデータ収集が可能な地域は9箇所であった。残りの41箇所については、諸被害（病虫獣害や気象害、ツル巻被害等）により試験途中でやむなく廃止された。この試験において、森林総合研究所研究報告第379号では、失敗原因を「計画実施のプロセスが短期間であったこと、短期育成試験地とし最適な条件を揃えられなかったこと」とし、長期試験における試験の初期設計の重要性を論じている。

そこで、本事業では、これらの試験結果を考慮して、試験地設計を地域や樹種にあったものとし、かつ、本事業終了後においても、適切に管理が実施されるように、所有者、施業実施者及び関係者に協力を求め、理解を得た上で、実証的植栽試験を実施していく必要がある。

また、本事業で実施したそれぞれの項目についての課題を以下にとりまとめる。

➤ 文献調査について

早生樹に関する文献は、本年度で概ね収集整理分析した。しかし、これから公表されるものや収集できなかった資料などが存在する。そのため、今後もデータ蓄積のための情報収集する必要があると考える。

➤ 既存植栽地の調査について

本年度は、センダン及びコウヨウザンの試験地を調査した。ヤナギ類については北海道が多く、チャンチンモドキについては現状では大分県、宮崎県のみで確認ができている。来年度は、センダン及びコウヨウザンの既存植栽地を追加調査し情報を蓄積するとともに、可能な範囲でヤナギ類及びチャンチンモドキの既存植栽地についても調査する必要があると考える。

➤ 種苗生産の実態把握調査について

種苗生産に関する情報は、本年度で概ね網羅された。しかし、調査時に、苗木生産及び育苗に関する課題が得られたため、実際の生産者や県の種苗組合に対して、個別にヒアリングをすることで更なる課題や他地域への参考となりうる情報が得られる可能性が高い。また、川上（生産者）～川中（植栽などの事業者）～川下（木材業界等のユーザー）の流れの中で、本年度については、川上側の情報のみ収集しているため、川中や川下側に対する情報収集も必要であると考ええる。

➤ 実証的植栽試験について

本年度の植栽樹種は、センダンとコウヨウザンであった。次年度においては、植栽地の初期保育（芽かきや下刈り等）を実施するとともに、新たに試験地を設けて、植栽することが望ましい。また、可能であればヤナギ類やチャンチンモドキについても検討する必要があると考ええる。

平成 29 年度
早生樹利用による森林整備手法検討調査委託事業
報告書

平成 30 年 3 月
(発行) 林野庁

(作成) 一般社団法人 日本森林技術協会
〒102-0085 東京都千代田区六番町 7 番地
TEL (03) 3261-5281 (代表) / FAX (03) 3261-5393
<http://www.jafta.or.jp>

